

## 第4章 古墳時代以前の調査

### 第1節 調査の概要

1区平坦部では近世以降の耕作土であるI層下面IV・V層上面で縄文時代の遺構と古墳時代の遺物包含層を確認した。1区平坦面は棚田造成に伴う削平を受けているため、古墳時代以前の遺構検出面は古代以降の検出面と同じであった。2区丘陵テラス部ではⅢb層が縄文時代の遺物包含層であることを確認し、Ⅲb層下面Ⅶ層上面を縄文時代の遺構検出面として精査を行ったものの、遺構は確認できなかった。2区丘陵頂部や斜面部にはⅢb層は堆積せず、Ⅱ層下面Ⅶ層上面が遺構検出面相当面となるが、遺構は確認していない。

1区の縄文時代の遺構は、土坑3基、自然流路1条で、いずれも1区平坦部の中央付近に位置する(第18図)。この付近は現状でも小さな谷地形となっており、本来は堆積が厚かったと推測できることから、周囲よりも削平の影響が少なかったと考えられる。

古墳時代の遺物包含層は1区平坦面のI7グリッド周辺の狭い範囲のみで確認している。この層も本来はある程度の広がりをもっていた可能性が高く、削平によって消滅したと考えられる。包含層には土器が多く含まれていたため、下面で精査を行ったが、遺構は検出できなかった。

2区丘陵テラス部のⅢb層には縄文時代早期末から後晩期にかけての土器や石器が含まれていた。Ⅲb層も本来は広範な広がりをもっていたと考えるが、傾斜が緩く流出を免れたテラス部以外では、Ⅱ層の母材となって再堆積した可能性が高い。

この他に表土・耕作土(I層)や古代以降の堆積層(Ⅱ層)から縄文時代から古墳時代にかけての遺物が出土している。このなかには遺構や遺物包含層では見られない弥生土器が含まれており、本遺跡の継続時期の幅広さが窺える。

古墳時代以前に帰属する遺物において、縄文時代早期末から前期初頭の土器が最も多い。また、同時期に帰属する可能性が高い黒曜石を主体とする石器が大量に出土している点は、縄文時代における本遺跡の性格を示すものと考えられる。

### 第2節 土坑

#### 土坑1(第19・20図、PL.6-1)

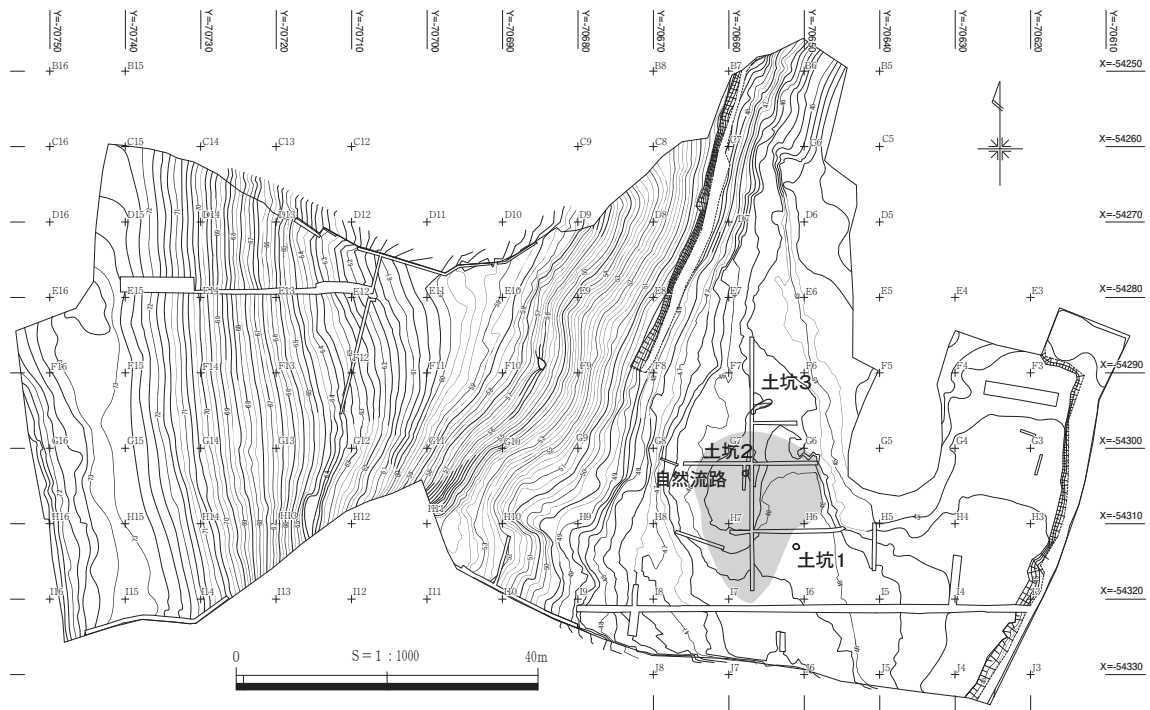
1区、H6グリッド東側の平坦面に位置する土坑である。平面形はほぼ円形で、規模は長軸0.90m、短軸0.80m、検出面からの深さは最大0.20mを測る。断面形は椀形で、底面は礫層となる。埋土は径3mm以下の砂粒を多く含む黒褐色土の単層で、埋土から縄文土器片や黒曜石剥片が出土した。

1は出土した土器片が複数接合したもので、西川津A類の深鉢である。接合しない他の小片の多くも1と同一個体と考える。なお、縄文流路から出土した小片も1に接合している。

遺構の時期は出土した縄文土器から縄文時代前期初頭と考える。用途は不明である。

#### 土坑2(第21図、PL.6-2)

1区、G6グリッドに位置する土坑である。平面形は径0.80mの円形で、検出面からの深さは最大0.70mを測る。埋土はシルト質粘土を主体とする3層に分層できた。いずれの層もしまり、粘性とも強い。1層中には少量の砂粒も認められた。底面は平坦で、断面形状は底がややすぼまる逆台形を呈する。底面にピットは検出しなかったが、形態から落とし穴の可能性はある。



第18図 縄文時代の遺構配置図

埋土から黒曜石製剥片や縄文土器が出土したが、小片のため図化していない。

出土した土器片は、すべて縄文時代早期末から前期初頭に帰属する可能性が高い条痕地文のもので、本遺構の時期もこの頃である可能性が高い。遺構の性格は不明である。

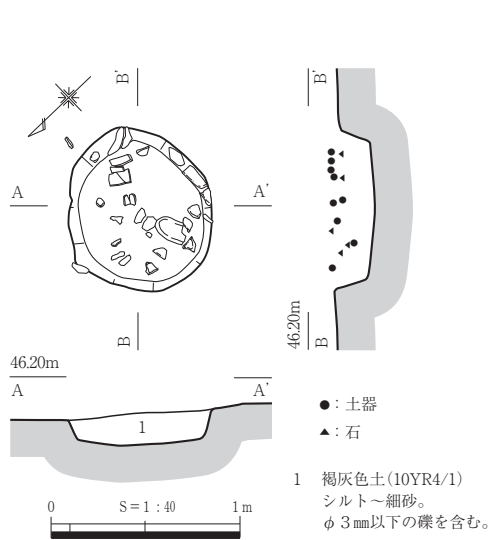
#### 土坑3 (第22図)

1区、F6グリッド中央やや西寄りに位置する土坑である。平面形は不整形を呈し、規模は長さ3.2m、最大幅0.80m、深さ0.25mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗褐色土の単層であり、埋土から縄文土器片と黒曜石製剥片が出土した。

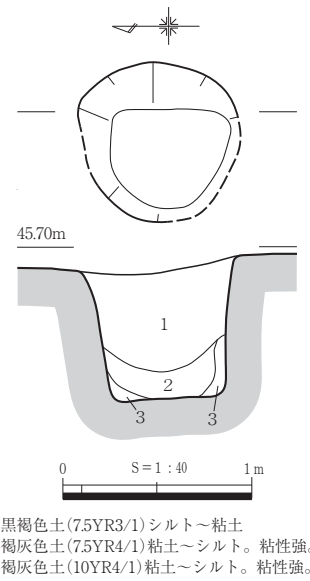
出土した土器は、すべて縄文時代早期末から前期初頭に帰属する可能性が高い条痕地文のもので、土坑2と同様の時期と考える。性格は不明である。

#### 第3節 自然流路 (第23・24図、PL.6-3)

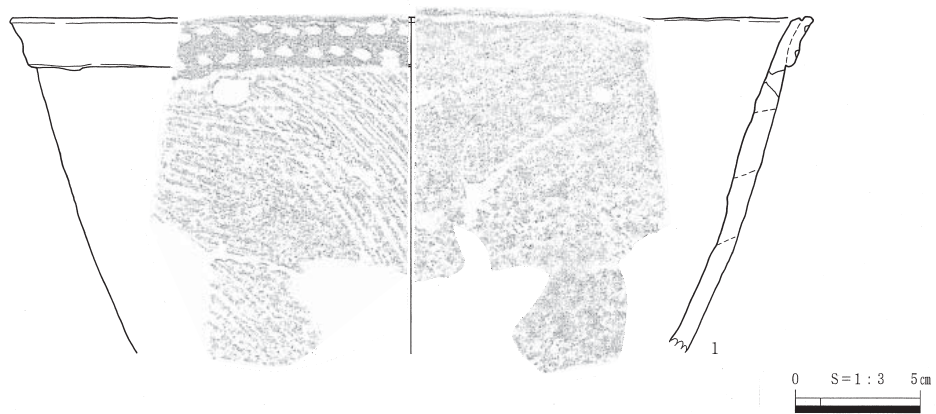
1区東向きの斜面は最大斜度が30°を超える急傾斜であるが、斜面を下ると概ね7グリッドラインを境にして東西幅20m、南北幅25mほどの平坦面となっている。この平坦面とその周辺は、後世に棚田として利用するために削平された可能性があるが、表土除去後の精査中に土師器や須恵器を中心とした遺物が多数出土した。そのため、この平坦面に土層確認用のトレンチを設定して土層及び出土遺物を確認したところ、土器がまとまって出土する層が複数あることが分かった。平面プランやトレンチの土層断面の観察から、これら遺物を多数包含する層は窪地、もしくは溝状を呈しており、谷筋に沿った自然流路による堆積と考えた。これらの流路から出土した遺物は2時期に分けられ、上層からは古代の須恵器などが出土し、下層からは縄文土器と石器が出土した。上層を古代流路と呼ぶこととし、下層を縄文流路と呼ぶこととした。ここでは縄文流路について報告する。



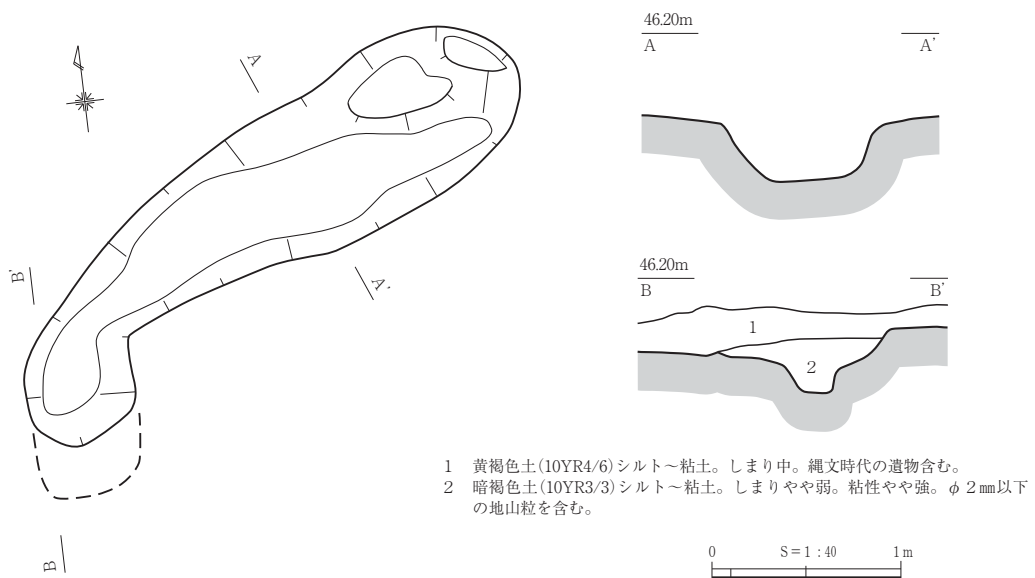
第19図 土坑 1



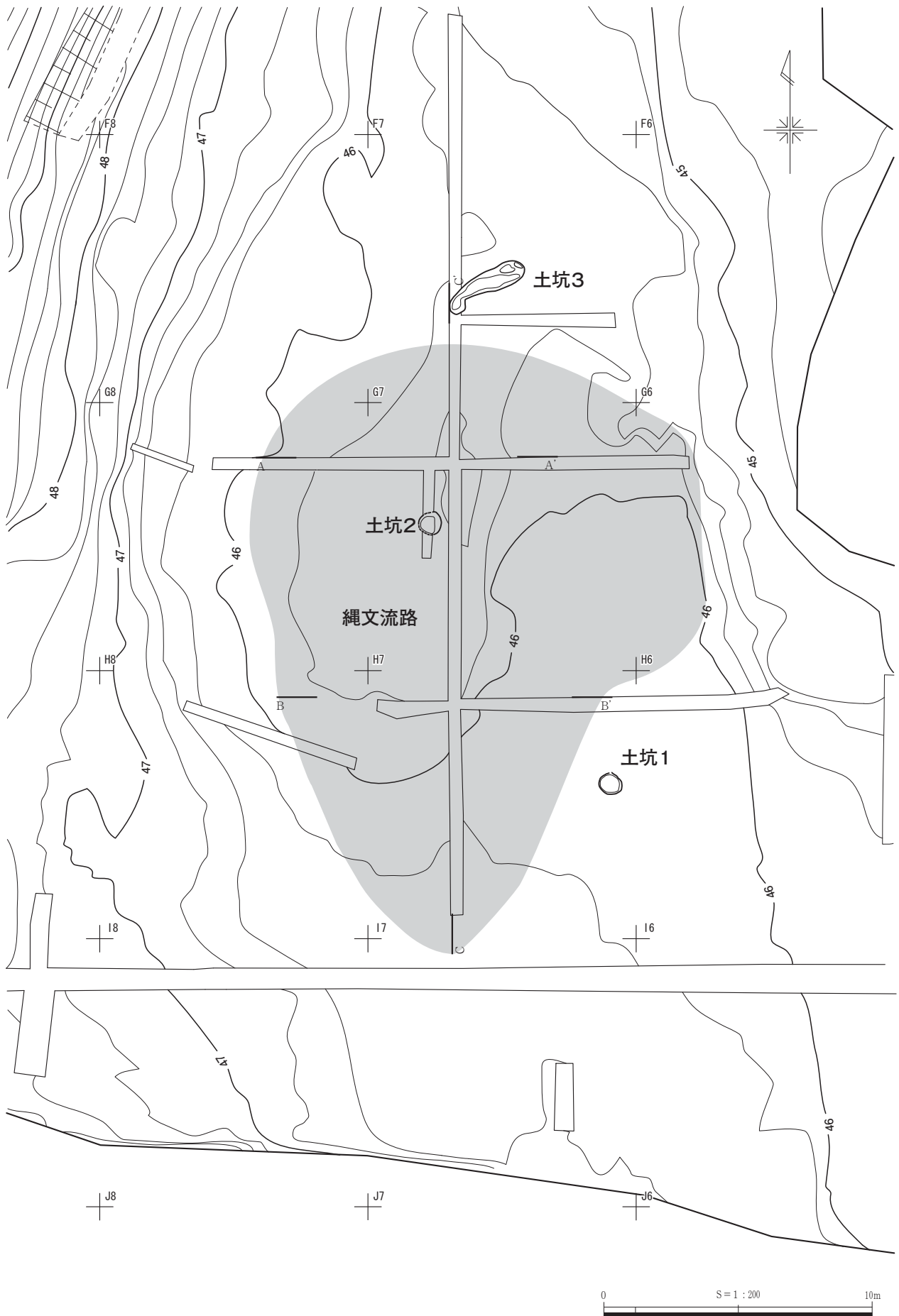
第21図 土坑 2



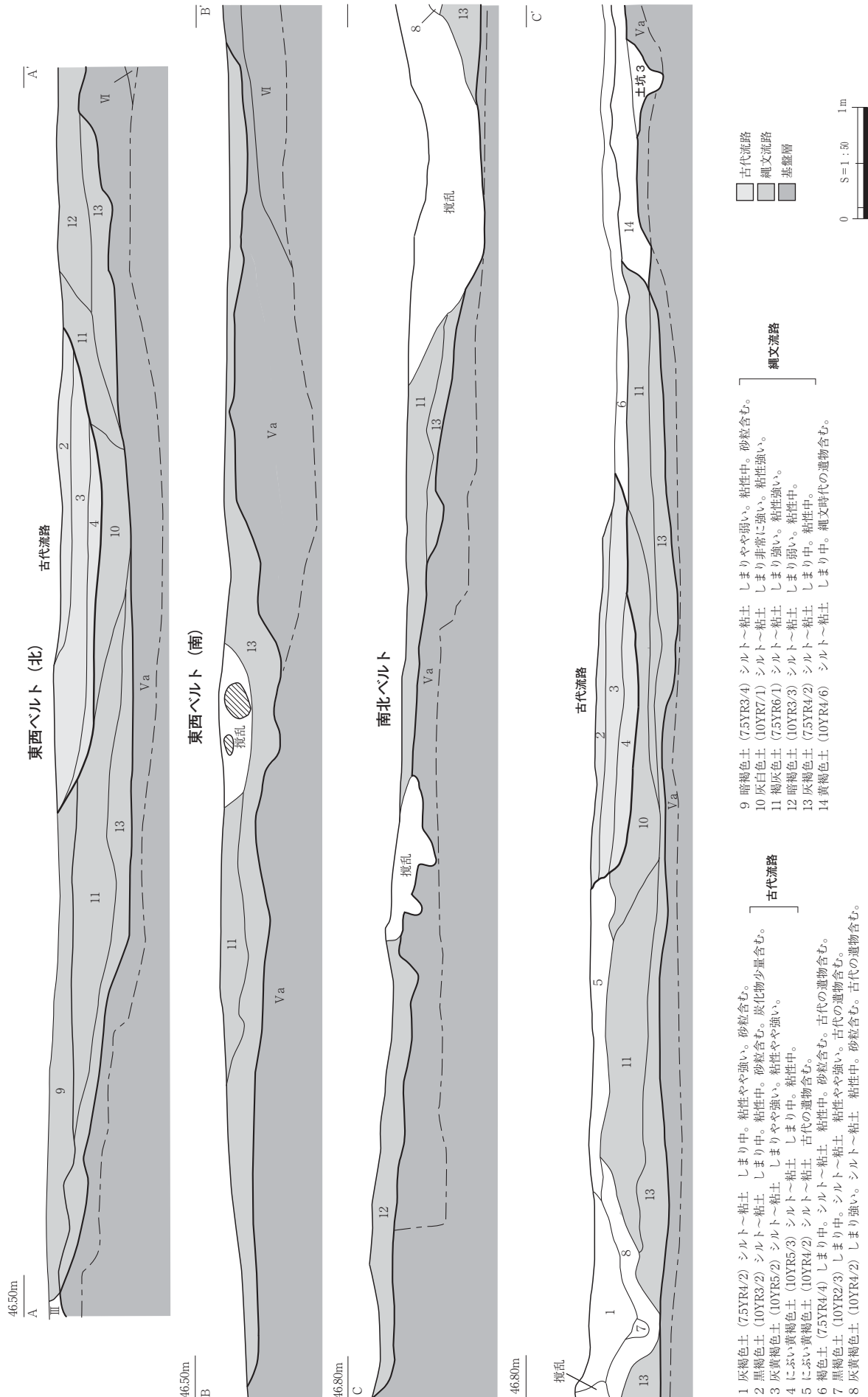
第20図 土坑 1 出土土器



第22図 土坑 3



第23図 縄文流路



第24図 自然流路土層断面図

## 第4章 古墳時代以前の調査

先述のように1区の斜面部は傾斜がきつく、調査中においても雨天時には谷筋に集まった雨水が平坦面へと流れ込み、その際に大量の泥が堆積する状況があった。これは当時も同様であったと考えられ、本来は窪地であったところへ泥を含む雨水が流れ込んでいたと推測できる。実際に埋土はシルトから粘土を主体とした滞水・止水性の泥質堆積物で構成されている。このように、本遺構は流路としたが、常時流水があった可能性は低く、基本的には滞水と離水を繰り返す環境下にあったと考えられる。また、これらの堆積層は土壌化が進んでおり、人為的な攪乱を受けた可能性が高い。堆積層中から遺物が多く出土していることから、離水時に流路内やその周囲で人間活動が行われていたと考えられる。

遺物は縄文土器と石器が多量に出土した。出土した縄文土器の時期は早期末から前期初頭に限られる。石器は敲石等安山岩製のものも一定量出土しているものの、主体は黒曜石製のものである。なかでも剥片や石核の出土量が突出しており、それらの出土量に比較すると石鏃等の製品の出土量は極端に少ない。流路周辺において縄文時代の住居址や製作址は検出していないが、削平により消滅してしまったと考えられ、おそらくこの近傍で石器製作を行っていたのであろう。

### 第4節 縄文土器

#### 1 概要(表3)

縄文土器は、縄文時代の遺構及び遺物包含層から1,249点、古代以降の堆積層から909点、出土地不明の64点を含めて総点数2,222点が出土している。

表3に示したように、西川津式を主体とする早期末から前期初頭の土器が2,072点出土し、全体の約93%を占める。次いで後晩期の粗製土器が多く、75点出土している。その他、僅かながら前期前葉の土器5点、中期土器1点、後期有文土器4点、突帯文土器3点、時期不明の土器62点が出土している。

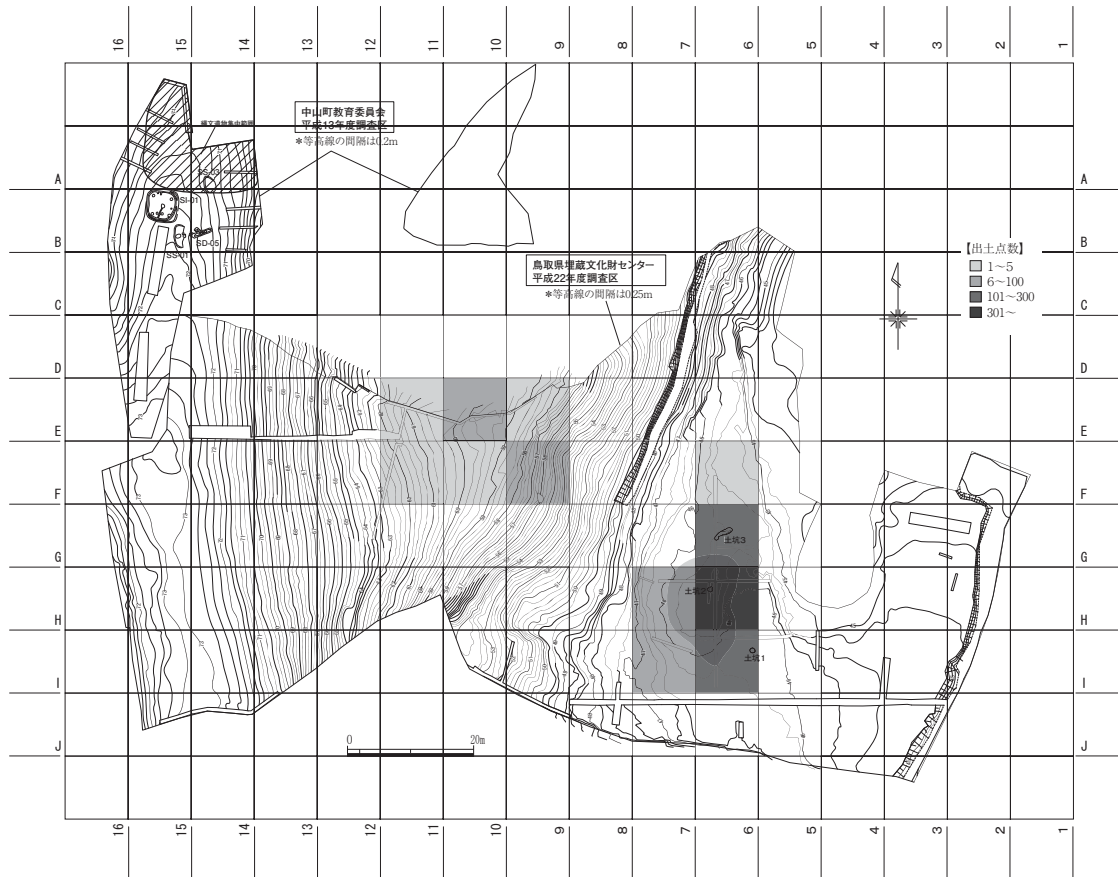
#### 2 分布状況(第25～28図、表4～8)

早期末から前期初頭の土器群と後晩期の粗製土器を主体とするその他の土器群について、それぞれの分布状況を示すために、出土点数の分布模式図(第25～28図)とグリッド別組成表(表4～8)を掲載した。古代以降の遺構出土の土器については遺構に直接伴うと考えられないことから、出土したグリッドの古代以降堆積層点数に加算した。ただし、古代流路出土の土器については、下層の縄文流路からの混入の可能性が高いことから、表中には出土数の内訳を示している。また、帰属時期の判断できない縄文土器は表では中期以降の点数に加算しているが、分布模式図には反映させていない。

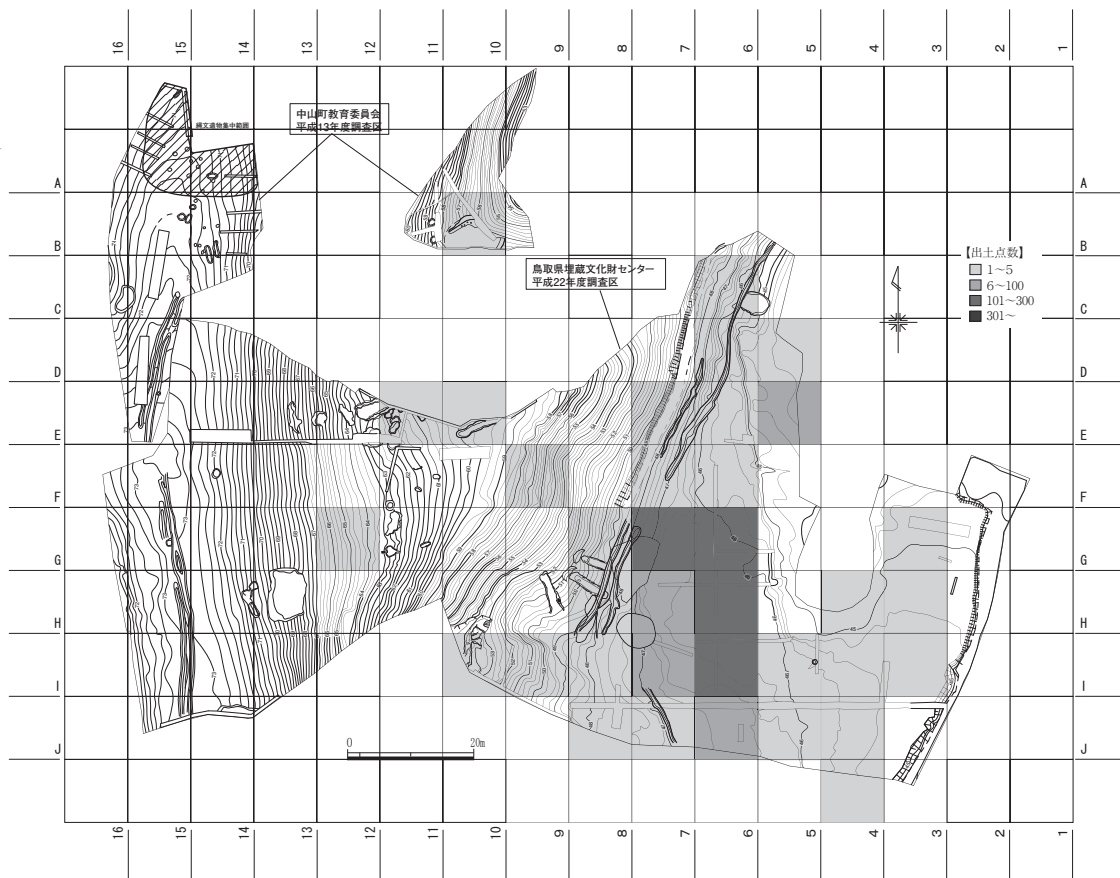
縄文土器の主体となる早期末から前期初頭の土器の分布は、1区G6グリッドを中心とした縄文流路やその周辺と、2区D10グリッドを中心とするテラスに出土が集中する傾向にある。この傾向は古

表3 縄文土器組成

出土遺構・層位	地区	長山式	西川津式	無文部			刺突文土器	中期土器	後期有文土器	粗製土器	突帯文土器	不明	地区別計
				縄文地	条痕地								
					繊維有	繊維無							
縄文遺構・包含層	1区	2	66	0	370	773	2	0	0	0	0	3	1216
	2区	0	2	0	5	14	1	0	0	2	0	9	33
	計	2	68	0	375	787	3	0	0	2	0	12	1249
古代以降堆積層	1区	0	42	6	192	528	1	1	3	37	3	36	849
	2区	0	2	0	2	4	1	0	1	36	0	14	60
	計	0	44	6	194	532	2	1	4	73	3	50	909
不明	1区	0	3	0	21	26	0	0	0	0	0	0	50
	不明	0	0	0	6	8	0	0	0	0	0	0	14
	計	0	3	0	27	34	0	0	0	0	0	0	64
分類別計	2	115	6	596	1353	5	1	4	75	3	62	総計	2222

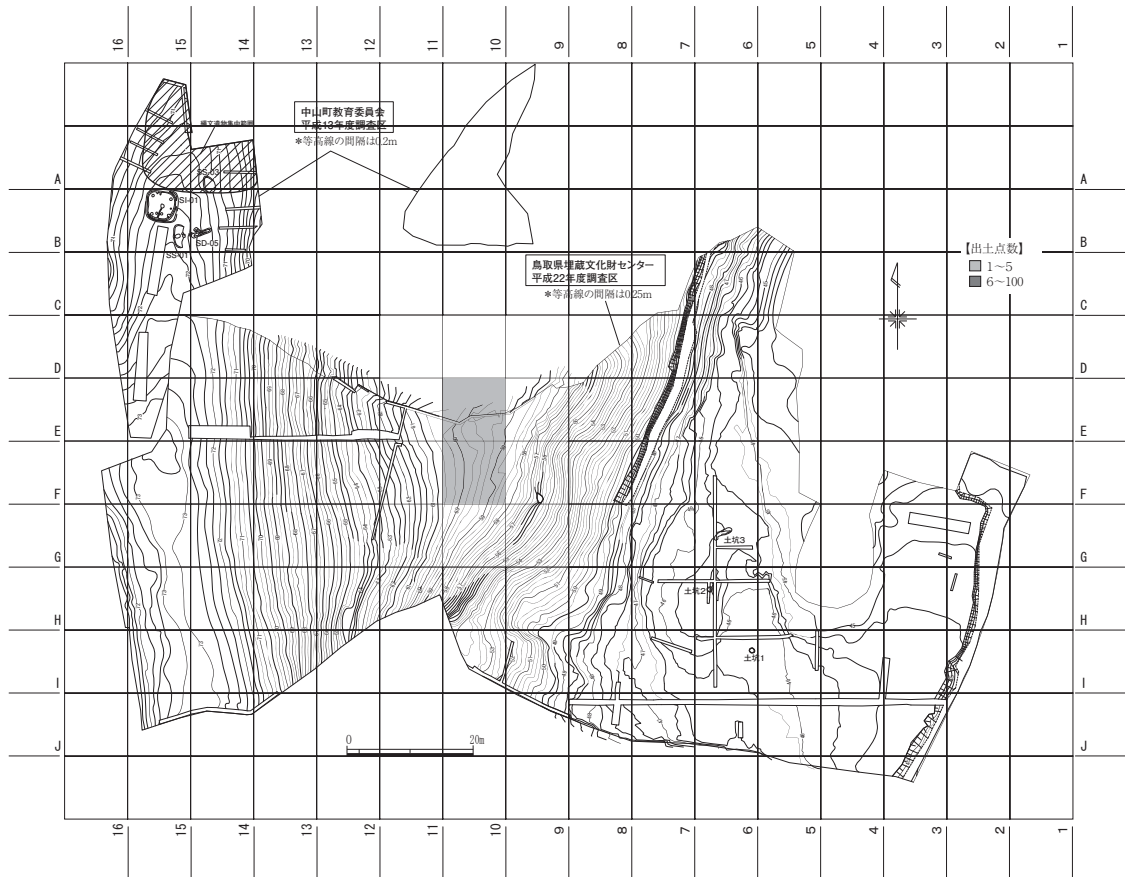


第25図 縄文土器(早期末～前期初頭)出土数量分布図(縄文遺構・包含層)

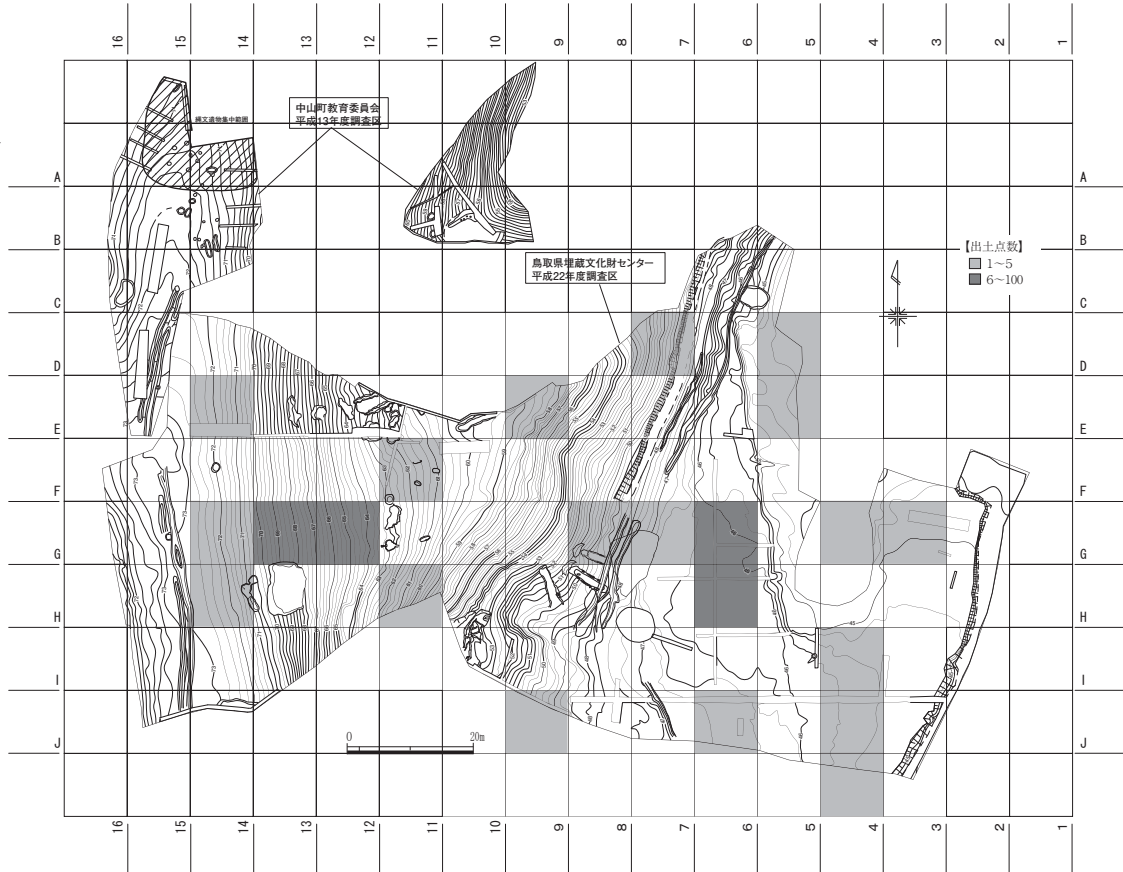


第26図 縄文土器(早期末～前期初頭)出土数量分布図(古代以降堆積層)

第4章 古墳時代以前の調査



第27図 縄文土器(中期以降)出土数量分布図(縄文遺構・包含層)



第28図 縄文土器(中期以降)出土数量分布図(古代以降堆積層)



表4 縄文土器(早期末～前期初頭)グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)

地区・グリッド	遺構/層位	長山式	西川津式	無文部		刺突文土器	計	備考	
				縄文地	条痕地 繊維有   繊維無				
1区	H6	土坑1		1		7	8		
	G6	土坑2			1	7	8		
	F6	土坑3			1	1	2		
	E6	縄文流路				5	5		
	F6	縄文流路		19	37	41	97		
	F6・G6	縄文流路				13	1	14	
	F6・G6・G7・H6	縄文流路					1	1	
	G6	縄文流路	2	20	180	502	2	706	刺突文：月崎式(前期)1・ 羽鳥下層I式(前期)1
	G6・G7	縄文流路		4	5	52		61	
	H6	縄文流路		15	44	120		179	
	H6・H7	縄文流路		3	52	4		59	
G7	縄文流路		2	15	27		44		
H7	縄文流路		2	17	10		29		
2区	D9	縄文包含層				3	3		
	E9	縄文包含層		1	2	2	1	6	刺突文：羽鳥下層I式(前期)1
	D10	縄文包含層				6	6		
	E10	縄文包含層		1	2	2		5	
	D11	縄文包含層				1	1		
	E11	縄文包含層			1			1	
分類別計		2	68	0	375	787	3	合計	1235

表5 縄文土器(早期末～前期初頭)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(1)

地区・グリッド	遺構/層位	長山式	西川津式	無文部		刺突文土器	計	備考		
				縄文地	条痕地 繊維有   繊維無					
1区	F6	古代流路		2		38	40			
	G6	古代流路		4		24	46	74		
	H6	古代流路				2	8	10		
	H6・I6	古代流路				4	8	12		
	G7	古代流路				14	18	32		
	F3	古代以降堆積層					2	2		
	G3	古代以降堆積層					2	2		
	H3	古代以降堆積層					1	1		
	G4	古代以降堆積層			2			2		
	H4	古代以降堆積層			4			4		
	I4	古代以降堆積層					1	1		
	C5・D5	古代以降堆積層				2	3	5		
	D5	古代以降堆積層				3	3	6		
	D5・D6	古代以降堆積層				3		3		
	H5	古代以降堆積層		1		2		3		
	I5	古代以降堆積層		2				2		
	B6・C6	古代以降堆積層				3		3		
	D6・F6	古代以降堆積層				3	4	7		
	E6	古代以降堆積層				1	2	3		
	F6	古代以降堆積層		7		13	48	68		
	G6	古代以降堆積層		7		21	52	80		
	H6	古代以降堆積層		7		18	75	1	101	刺突文：羽鳥下層I式(前期)1
	I6	古代以降堆積層					3	3		
	D7	古代以降堆積層				1		1		
	E7	古代以降堆積層				2		2		
	F7	古代以降堆積層		2		13	87	102		
	F7・G7	古代以降堆積層					1	1		
	G7	古代以降堆積層		2		27	29	58		
	G7・H7	古代以降堆積層		1		4	1	6		
	H7	古代以降堆積層		2		19	43	64		
	I7	古代以降堆積層				1	1	2		
	F8	古代以降堆積層				1	1	2		
	G8	古代以降堆積層					1	1		
	H8	古代以降堆積層				1	1	2		
	I8	古代以降堆積層					3	3		
	H9	古代以降堆積層				1	2	3		
	D10	古代以降堆積層				4	3	7		
	H10	古代以降堆積層				1	1	2		
	南部平坦面	古代以降堆積層		1			1	2		
	不明	古代以降堆積層		4		4	39	47		
F6	不明				2		2			
H6	不明		1		3	3	7			
H7	不明				14	13	27			
不明	不明		2		2	10	14			
2区	E9	古代以降堆積層			1		1	2	刺突文：羽鳥下層I式(前期)1	
	D10	古代以降堆積層		1		1	3			
	D11	古代以降堆積層		1		1	2			

第4章 古墳時代以前の調査

表6 縄文土器(早期末～前期初頭)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)(2)

地区・グリッド	遺構/層位	長山式	西川津式	無文部		刺突文土器	計	備考
				縄文地	糸痕地			
				繊維有	繊維無			
2区	F12	古代以降堆積層				1	1	
	不明	古代以降堆積層				1	1	
不明	不明	古代以降堆積層			2	1	3	
不明	不明	不明			4	7	11	
分類別計		0	47	6	221	566	2	合計 842

表7 縄文土器(中期以降)グリッド別出土点数(縄文遺構・包含層)

地区・グリッド	遺構/層位	有文土器	粗製土器	突帯文土器	不明	計	備考
1区	G6	縄文流路			2	2	
	H7	縄文流路			1	1	
2区	E9	縄文包含層			2	2	
	D10	縄文包含層	1		7	8	
	E10	縄文包含層		1		1	
分類別計		0	2	0	12	合計 14	

表8 縄文土器(中期以降)グリッド別出土点数(古代以降堆積層)

地区・グリッド	遺構/層位	有文土器	粗製土器	突帯文土器	不明	計	備考	
1区	F6	古代流路			8	8		
	G6	古代流路			2	2		
	F3	古代以降堆積層		3		3		
	F4	古代以降堆積層		2		2		
	H4・I4	古代以降堆積層		8	2	10		
	J4	古代以降堆積層		1		1		
	C5・D5	古代以降堆積層		1		1		
	F6	古代以降堆積層		7		11	18	
	G6	古代以降堆積層	1	9	1	7	18	有文:後期1
	H6	古代以降堆積層				3	3	
	I6	古代以降堆積層		2			2	
	F7	古代以降堆積層	2	3		1	6	有文:後期前葉2
	H7	古代以降堆積層				1	1	
	F8	古代以降堆積層		1			1	
	G8	古代以降堆積層				1	1	
	I8	古代以降堆積層				1	1	
	G9	古代以降堆積層				1	1	
	I9	古代以降堆積層	1				1	有文:鷹鳥式(中期初頭)1
2区	C7	古代以降堆積層		2		2		
	D9	古代以降堆積層		1		1	2	
	E9	古代以降堆積層				1	1	
	E11	古代以降堆積層		2			2	
	F11	古代以降堆積層				1	1	
	G11	古代以降堆積層		1			1	
	F12	古代以降堆積層		7			7	
	F13	古代以降堆積層		18		5	23	
	C14	古代以降堆積層				2	2	
	D14	古代以降堆積層	1	1		1	3	有文:後期1
	F14	古代以降堆積層		2			2	
	G14	古代以降堆積層		1			1	
	H14	古代以降堆積層				2	2	
不明	古代以降堆積層		1		1	2		
分類別計		5	73	3	50	合計 131		

古代以降堆積層でも変わりなく、分布が拡散し二次的な移動が窺えるものの、集中出土範囲に大きな差は認められない。この分布のあり方は、粗製土器を主体とする土器群でも認められ、両者は混在する関係にあるといえる。一方、様相が異なる点としては、早期末から前期初頭の土器が全く出土していない2区斜面地に粗製土器の分布域が認められる点にある。とくにF12～13グリッドでは粗製土器がまとまった量出土しており、出土数が少ないが、斜面上方のD14・F14・G14や下方のE11・G11グリッドでも分布している。以上をまとめると、1区では濃密な分布域がいずれの時期の土器も重複するが、2区では早期末から前期初頭の土器が主体となる範囲と、粗製土器しか出土しない範囲が認め

られ、両者の分布の在り方が異なるといえる。

### 3 早期末～前期の土器

#### (1) 型式組成

概要で述べたように、この時期に帰属する土器が本遺跡出土の縄文土器の主体となる。遺構及び遺物包含層から1,235点、古代以降の堆積層から842点が出土しており、合計2,077点が出土した。

このうち、早期末から前期初頭に帰属すると判断した土器2,072点は、有文部の特徴から、隆帯文土器(長山式土器)と西川津式土器に大別される。また、体部片については地文が縄文地のものが6点、条痕地のものは1,949点認められる。縄文地のものにはすべて胎土に繊維混入が確認でき、隆帯文土器の体部片と判断した。条痕地のものは、胎土に繊維混入が見られるものが596点、見られないものが1,353点出土したが、無文の体部片についてはいずれの型式に帰属するものか判断できなかった。

これらの土器のうち、特徴的な施文や隆帯・肥厚帯をもつ土器を中心に図化している。2～23は縄文流路出土、24～37は遺構外出土の土器である。

#### (2) 隆帯文土器(第29・30図、PL.70)

縄文地の土器は6点出土している。出土地が近接することから同一個体片を含む可能性がある。いずれも体部片で、内面は条痕かナデ調整が施される。このうち1点を掲載した(第30図30)。外面はRL単節縄文、内面は貝殻条痕後にナデで仕上げられている。

繊維混入が見られる条痕地の土器のうち、隆帯をもち長山式に帰属すると判断したのは2点である(第29図2・3)。いずれも口縁部片で、器種は深鉢で調整は外面が貝殻条痕、内面にはナデが施されている。2は口縁部下位に隆帯をもつ。隆帯の断面形はやや丸く、棒状工具による刻みが施される。3は口縁端に隆帯をもつ。隆帯は口唇上にやや潰れたように貼り付けられる。隆帯上および胴部には押引きが施されている。押引きには二枚貝を切断加工した工具を使用した可能性がある。

#### (3) 西川津式土器(第29・30図、PL.70)

西川津式土器は破片数で115点が出土している。先述のように、条痕地の体部片については長山式土器と西川津式土器を明確に区分することができなかったが、口縁部の出土数では西川津式土器が長山式を圧倒しており、体部片もその大半は西川津式土器のものとする。

図化したのは縄文流路出土の4～20(第29図)、遺構外出土の24～29・32～35(第30図)である。いずれも深鉢で西川津式A類である。内外の調整は貝殻または植物質工具による条痕か、ナデが施されている。このうち胎土に繊維混入が認められたのは4・17・18・21・30である。

4の肥厚帯断面はやや丸みをもつ。肥厚帯には棒状工具による押引きが施されている。5～15は幅広の肥厚帯をもつ。このうち5～13は肥厚帯に貝殻腹縁による連続刺突または押引きが施される。5は波状口縁で、波頂部内面には接合痕が明瞭に残る。9は口縁端部よりやや高い位置に肥厚帯を貼り付けており、やはり、内面に継ぎ目が明瞭に残る。11の隆帯の位置は口縁部下位にある。体部への施文は、7・11に貝殻腹縁による連続刺突、12・13は竹管による押引き状の連続刺突が認められる。14は肥厚帯に棒状工具による連続刺突が認められ、体部も同様に棒状工具の連続刺突が2列施される。15は無文の肥厚帯をもつ土器である。

16は口縁部に肥厚帯をもたず、口縁端部に刻みが施される。長山式に含まれる可能性もある。17は小型の深鉢で口径10cm程に復元される。体部には貝殻腹縁による連続刺突が3列施されている。18～20は体部片で、貝殻や竹管による連続刺突が施される。